

神武東征の出発点はどこか

白崎 勝

1、はじめに

これまで地名や山名に記録された歴史を、10年ほど研究してきた。その結果から、「神武東征の出発点」について認識できたところを発表する。

記紀が記す神武東征は、小さな集団が瀬戸内海を船で進み、熊野に迂回し奈良に入った物語と考える人もいる。しかし実態は、北部九州の倭国のクニグニとの連合による、綿密に計画された7年をかけた東遷であった。

図1は、同名の山に記録されたもので、いくつかの部隊が九州を出発し、中国・四国地方を隈なく遠征し、熊野も迂回した記録になっていた。記紀が倭国との連合のことを明確に記していないのは、神武は倭国の一員なので、連合するのは当然で書くまでもないと考えていたかも知れない。あるいは最後まで生き残った神武を中心に書いてしまったので、連合のことが書き抜けたのかもしれない。

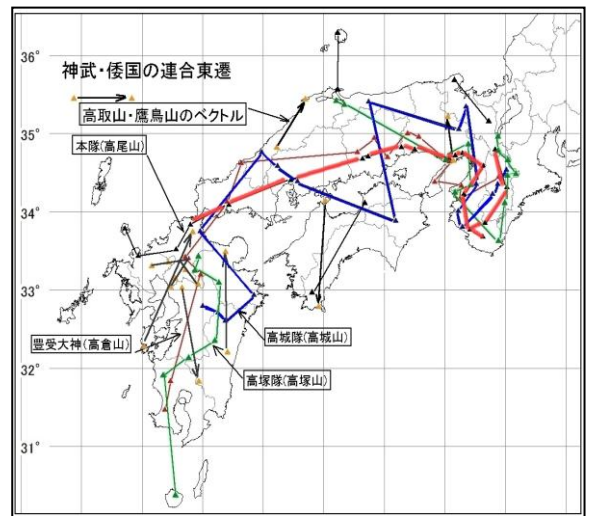


図1 神武東征の足跡

記紀の記述のみを見れば、出発地は船出の場所を推測する。しかし出発とは本人の認識の問題なので、当事者の神武兄弟や一緒に東征を決断した、当時の倭国王・台与(豊受大神)にとっては、計画が進展するたびに、決意をあらたにする出発の認識があったと思われる。

オリンピックに出場する選手を想定してみよう。出発前の選手団の結団式や、門前での見送り、地方空港での見送り、成田空港での出発などその都度、見送られながら決意を新たにすると思われ、それぞれが新たな出発である。

図2は山に記録した、九州の出発の様子である。

出発地と到着地に同じ名前や、似た名前を付けることはよくあることである。

邪馬台国と記す邪馬台は本来は「やまと」と読むと思われるが、これを到着地の奈良ではダイワと書く「大倭(やまと)」としたのは、その一つと考える。

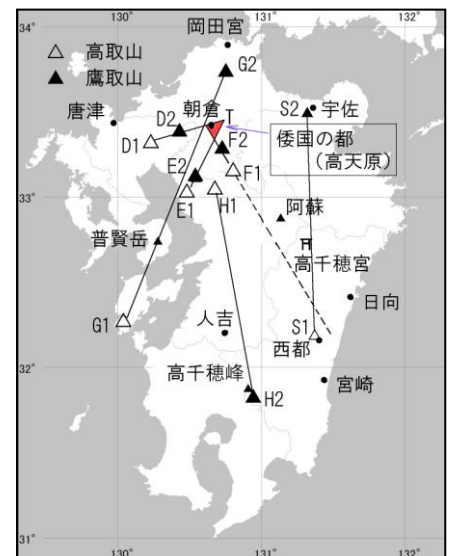


図2 九州の足跡

朝倉市付近の多くの地名が、奈良の桜井付近に移動しているという安本美典の説も、出発地と到着地に名付けた一つのパターンである。図2の福岡県朝倉市付近に記録された三角域は、邪馬台国にあった都で、多くの人々が集合した出発点と思われる。

2、柏原という出発点。

神武兄弟は東征出発にあたり、大隅半島にある父・鵜萱葺不合命の陵に参拝し、東串良町の柏原から船で出発した伝承が残る。

図3は戸柱神社の由緒で、「神武天皇御東遷の準備がなされた田畑に航海安全を祈って創建されたものを約千年前に当地に遷座されたという。」とある。

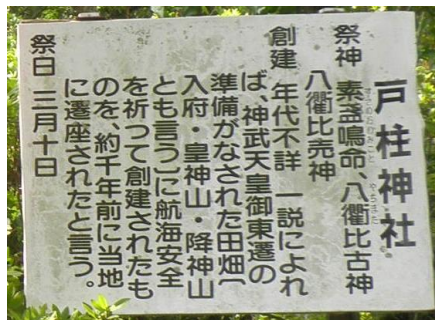


写真1 戸柱神社由緒



写真2 戸柱神社

写真2は戸柱神社から、陵の方向を見ている。また境内には神武天皇発航の地の碑がある。到着地の奈良の樞原は、出発地をこの東串良町の柏原と認識していた名付けと思われる。

3、高千穂宮からの出発

古事記は「日向より発たして、筑紫に幸行でましき。故、豊国の宇沙に到りましし時、・・・」と、出発の様子を述べていて、順次式に読めばまず筑紫に向かったことになる。

神武は日向市の美々津から、出発した伝承があるが、そうすると、出発前の高千穂宮での、兄弟による東征の相談は方向違いの山の中で行ったことになる。兄弟の東征の相談は、北部九州のクニグニと連合するための集合地で、ここから阿蘇を越えて邪馬台国にある高天原に向かったものと思われる。

このことが図3の九州の高取山のベクトルで記録されていた。

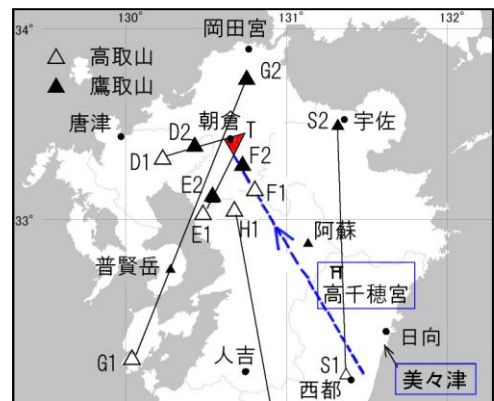


図3 高千穂宮からの出発

4、北部九州のクニグニの人々の出発。

神武が船出した美々津と奈良の耳成山も、出発地と到着地に名付けたパターンで、この耳は、魏志倭人伝が記す投馬国の官・弥弥や副官・耳那利のことと考える。

魏志倭人伝が記す伊都国の一大卒は、神武兄弟たちの別な役割と考えている。したがって、北部九州に別人が率いる大部隊があったわけではない。

兄弟たちは手分けして、杵岐や五島列島、天草まで出かけて、東征が決まったことの宣布と東征に参加する兵を募ったか、命令を下したと考える。

図4は北部九州を調べた結果の図で、博多湾沿岸国も矢印のように進み大宰府付近で合流した記録である。

筑紫平野・五島の人々は朝倉に集合している。天草や島原の人々は、朝倉を経て北九州に向かっている。それぞれに出発地がある。

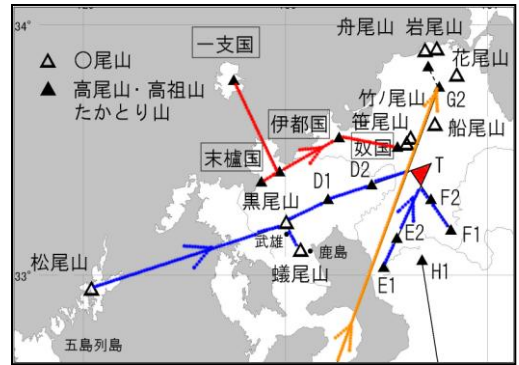


図4 北部九州の足跡

5、狗奴国と決着をつけた部隊の出発

主のなくなった九州で、敵対していた狗奴国が跋扈（ばっこ）しては困る。決着の戦いがあったかどうか、不明であったが痕跡が見えてきた。

図5のように高城山を名付けた部隊が狗奴国と戦ったようで、南阿蘇にある高城山から経路が記録されていた。

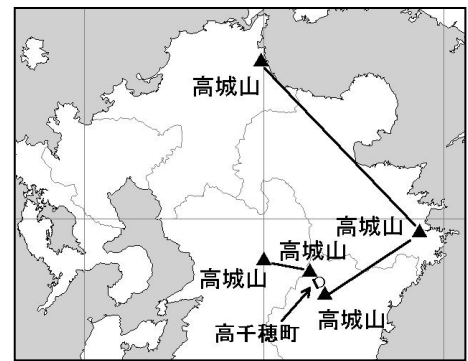


図5 高城山の足跡



図6 九州の鉄の遺跡

一方、熊本地方や阿蘇地方から大野川流域にかけて鉄器の

出土、鉄遺跡が多くあることが知られてる。九州の大きな鉄遺跡を結んでみると、図6のようになった。高城山の経路とよく似ている。狗奴国と決着の戦いを付けた後、阿蘇のリモナイトを利用した鉄武器を準備して神武隊と佐伯付近で合流したと思われる。

図7は、弥生終末期に熊本平野や大野川流域で見つ

かる破鏡の出土分布図で、お墓でなく集落跡から見つかる。

この破鏡は、東征に参加した兵が家族との別れに、鏡を割って親子・兄弟・夫婦が分け持ったもので、兵が持っていた鏡が激しい行動やあわただしい移動で紛失したものと考えている。

古墳時代になると、この付近からは破鏡が全く出土しなくなるので、東征が終わったからと考えれば納得できる。

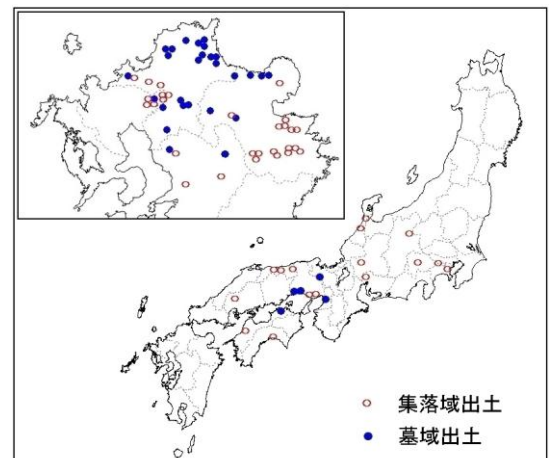


図7 弥生後期の破鏡分布

6、神武の出発地

九州のベクトルを読み取ると、神武は倭国連合での東遷を決めると、いったん南九州の投馬国(都萬)にもどり、兵を募り戦いの準備をして出発したことが分かる。

投馬国の都がある都萬神社近くの西都原に出発の記録と思われる高取山がある。これのベクトルの先は、宇佐神宮の近くにある鷹取山で、ちょうど南北になっていた。

船出は美々津からだったが、神武の出発地の認識は大隅半島の柏原とこの西都原だったことが分かる。



写真3 明日香の高取山

そして到着地の高取山は、明日香の南に高取山を残している。写真は明日香の首塚から見た、高取山である。

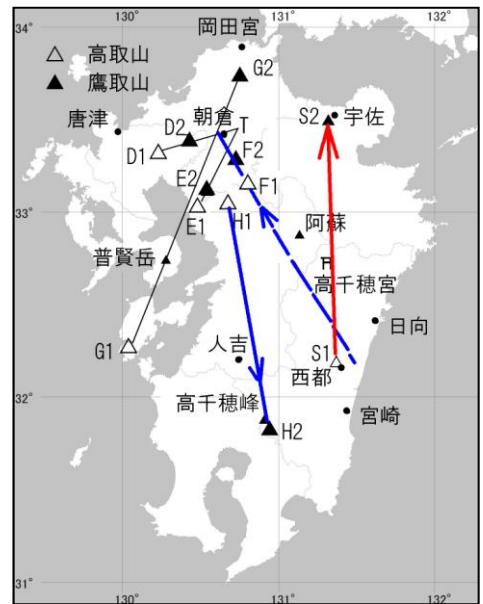


図8 神武の出発

7. 豊受大神(台与)の出発

神武とともに東遷を決めた豊受大神は、九州に残ったわけでない。

図9のように南九州に新しい国づくりを実践したニニギの陵に詣でた記録を、高倉山に記録していた。出発にあたり先祖に東遷を行う報告と東遷の加護を祈願するのは、倭国王として当然な行いである。



図10 高塚山の足跡

豊受大神は女性だったので、お守りしたのが高塚山を残した部隊であったことが、その足跡からわかる。

図10は朝倉を出発し、いったん南に下る高塚山を残した部隊の足跡で豊受大神を守った部隊と考える。

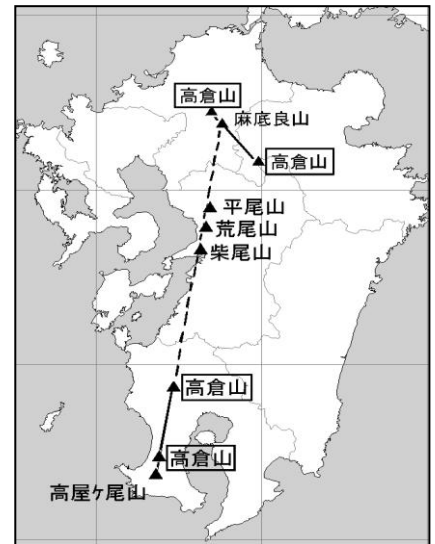


図9 豊受大神の足跡

8、国造りの認識としての出発地と到着地

ニニギは新しい国づくりのために、「天孫降臨」という名で、南九州に降っている。そのとき南九州の入口の高千穂町に、「国見が丘」を名付けている。



写真4 国見が丘の像

写真4はその国見が丘にある像である。ニニギはその後、高千穂峰を逆「の」の字型に7年をかけ開拓の遠征をしている。その経路には○

○丘と○○岡という名の山で経路を記録していた。

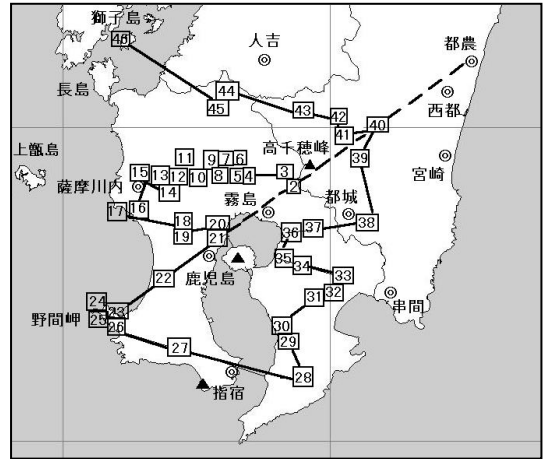


図11 東征の足跡

神武は東征を「ニニギの国造りの延長」と認識していたようで、東征に同じ7年をかけていた。

また到着地の橿原付近には「甘樫丘」を残している。このことから、兄弟は出発地に高千穂町の高千穂宮を選んだのかも知れない。

最後に

神武東征が宮崎から出発したとされても、考古学的な遺物は北部九州から奈良に移動しているの、遺物と整合しない。一方、考古学的遺物からは、神武東征は導き出せないの、二つの考えが合体することは望めない。

この二つを結びつける説は、神武と北部九州の倭国が連合して東遷した説しかなく、それを文献でもなく考古学的遺物でもない地名や山名に残した記録が、明らかにしていた。

以上



写真5 甘樫丘